

# 本をつくる楽しみ

前・詫間キャンパス図書館長  
松下 浩明



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。在学生の皆さん、年度末試験ごくろうさまでした。新しい年度が始まります。図書館を大いに利用し、充実した年にしましょう。

私はこれまで書籍や図書館に対し、さまざまなかわり方をしてきました。今日は私の本づくりの楽しみについてお話しします。

図書館や町の本屋さんに行くといろいろな種類の本を見ることができます。そして、これらの書物を借りたり、購入したりして、楽しみ、知識を得ようとします。私は書物を見たとき、このような本を自分で作れたらどんなに愉快だろうかという思いに駆られることがたびたびありました。

私が本校に赴任したころ、情報工学科ではソフトウェア技術者をいかに育てるかという議論があり、私を含め、三名の教員で演習書をつくることになりました。その頃の実験書や演習書のたぐいは通常、簡易輪転機を使ってわら半紙に印刷し、ステープラー（いわゆるホッチキス）でとめて、学生の皆さんに配るという仕方をしていました。私はこれからつくる演習書を本という形にしたいと

密かに思いました。学科の柱となる演習書をつくるのだという、今考えれば若気の至りとも言える高慢な発想でしたが、学科の先生方にお願ひし、学科予算を融通していただきました。絵の得意な学生さんに表表紙、裏表紙のデザインをお願ひし、二百ページほどの演習書が出来上がったときのうれしさは大層なものがありました。

演習書を本にするという試みは費用の関係もあり、教科書関連書籍を出版している出版社に売り込むという方向に進みましたが、本をつくるよい経験でありました。

その後しばらくして、本校に専攻科ができ、私はある科目の授業を受け持つことになりました。そして、本をつくりたいという身中の虫が再びうずき始めました。本をつくるというと費用や時間がたいへんかかり、簡単にできるものではありません。私はそのころ、数名の読者しか仮定しない、三、四十ページほどの本をほとんど費用なしでできないものか、と考えておりました。

インターネットで製本のしくみを調べていますと、針と糸、のりだけ使った簡便な製本が可能かもしれないと思えるようになりました。受講している学生に、数名の組になって協同して一冊の本を作成せよという課題を与えました。「C言語」や「Java言語」、「アルゴリズム」など毎年少しずつテーマの異なった解説本の作製を行いました。普通だとレポートという形での提出となる訳ですが、それを本の形にまで持っていくというのが私のこだわりでした。

工学実験書やレポート類は学生や教師という目の前の読者しか対象としませんが、本にすると、見知らぬ読者を仮定せざるを得ません。将来、その本を読むかもしれない見知らぬ読者はその本を辛辣に批評したり、望外の賛辞を与えたりしてくれるかもしれません。そのように考えてつくる本は苦しくもあり、楽しくもあります。

## 教員によるエッセイ

### 生きること、旅すること、読むこと

人生は旅なり。目的や目的地がしっかりした旅もあり、当てもなくさまよう旅もある。どちらも魅力的な旅である。しかし旅も人生も無限に続けることができない。限られた時間の中で、限られた条件の中で、可能な範囲で品質管理の定石PDCAサイクルを廻し続けるしかない。自身が他人よりも優れた資質を持っていれば旅は広く遠くへ行けるかもしれないが、生まれながらにハンディを持っていれば、狭い範囲に甘んじることを受け入れなけ

元機械工学科  
福井 智史



ればならない。旅と人生に不平等はつきものである。皆さんの今までの旅と人生はいかがでしたか。

不平等に満ち溢れた旅と人生ですが、嘆く必要はありません。人類は言語を発明し、絵画や写真、さらには動画を発明しました。以前には生きるだけで精一杯で、それらを得るための教育と情報を得るだけでも大変な時期がありましたが、今の皆さんは手軽に手に入るようになりました。私のように、学生時代に世界を放浪し損ねて

社会人になってしまって後悔したとしても、沢木耕太郎氏の深夜特急<sup>1)</sup>を読めば、リュックひとつで世界を旅する疑似体験が手に入ります。私のように、日々対話する学生諸君の心の闇に自分がどこまで寄り添えるのか迷えば、河合隼雄氏の臨床心理学に関する書籍<sup>2)</sup>に答えのヒントを探ることができます。私のように、自分は人生で何を成し遂げられるのか、それとも何も為さずに藻屑となる無価値な人間なのかと迷えば、沢木耕太郎氏の敗れざる者たち<sup>3)</sup>を読めば生きる価値を見出せるかもしれません。私のように、思考の切り替えが速く会話がポンポン跳ね回るようなAB型同士のクールな恋愛に憧れるなら、森博嗣氏の連作<sup>4)</sup>を読んで犀川教授に感情移入して気分転換するのもいいかもしれません。

話が大きくそれましたので戻します。産業革命と同時に生まれた職業Engineer、この仕事の語源は紛れもなく蒸気機関の爆発事故を防いだエンジン屋です。彼らの末裔となる高専生諸君は、学舎では学びきれない膨大な先人の知識を書籍からしっかり学び取って下さい。人生は短いですが、技術を学ぶには十分長いです。本を片手に人生と旅を謳歌してください。

#### 参考文献

- 1) 深夜特急1巻～6巻 沢木耕太郎, 新潮文庫, 1994年.
- 2) 例えば こころの処方箋, 河合隼雄, 新潮社, 1992年.
- 3) 敗れざる者たち, 沢木耕太郎, 文春文庫, 1979年.
- 4) S&Mシリーズ10冊, 森博嗣, 講談社文庫, 1998年.

## 電子書籍が教えるテクノロジーの「最後の壁」

一般教育科(物理)

黒木 経秀



私は電子書籍を持っていない。論文を流し読みするときなどはファイル上で読むが、じっくり読み込みたいときはやはり印刷してしまう。経費や、ひいては天然資源を考えると、電子空間で読書した方が良くに決まっている。そもそも紙媒体で保存するより、データで残した方が消失、焼失の恐れもなく、スペースも取らず、将来的にはその方向に向かうことは明らかである。図書館も例えばフォルダ内から電子書籍を選び、期間限定のパスワードを貰って電子的に読むようになるだろう。これなら人手もいらず、そもそも図書館に行く必要さえなくなる。これらの理屈は分かっている、現実的にはどうしても紙に頼ってしまう。やはり精神的な部分で、紙に回帰したがる自分があるようである。

同様のことは各種テクノロジーに共通するよう感じる。人間が移動することは地球に良くないことは自明である。燃料を消費して移動し、わざわざ全員が一か所に集まって議論や授業をするより、電子空間でこれらをこなせば、各自移動せず事が済み、限られた資源の保全や地球温暖化対策になる。相手の目を見て話さないと伝わらないという人がある。しかしテクノロジーが進化すれば、電子的に自分の姿を投影し、表情はそこから読み取れるであろう。電子空間では実体がないという人もいる。「実体」は私の専門の素粒子物理学の根本的問題だが、通常そもそも「実体」の定義自体ひどく主観的である。電子空間の自分が本人そっくりのアウトプットを出すようになれば、「どちらが実体か」はますます曖昧になっていくであろう。そもそもどちらが実体かなど些末な問題となると予想される。生まれたときから電子空間で育ってきた人には、実体はむしろ電子空間にあると言った方が

よい場合もあるだろう(この辺り、推薦図書で紹介した森博嗣の犀川・西之園シリーズに登場する天才科学者・真賀田四季の影響を多分に受けています。興味ある方はご覧ください)。

私自身が電子空間出身でないせいか、それでも人は自分にとっての「実体」に拘り続ける気がする。自分が移動することで環境を破壊し自分の首を絞めることを理解しているのに、テレビ電話で済まざりにわざわざ人に会いに行く愚かさがそれを示している。そもそも人間は非効率で理不尽な存在であり、効率化を目指すテクノロジーとは対極の存在である。これはどちらが悪いという問題でなく、目指すものが違うだけの話である。従って、テクノロジーが最終的に乗り越えなければいけない壁は「人間性」になると予想される。例えば、最先端のテクノロジーによって、相手の手の形状、ぬくもり、動作を再現できたとしても「現実」のあの人と握手したい、と考える人に会いに行く人は結局いなくなるであろう(もしかすると生まれつき電子空間で握手してきた人は、そう思わないのかもしれないが...)。そもそもテクノロジーは人のためにあるわけだが、効率を極めようとするテクノロジーが、効率以外のものに価値を見出す「人間性」に最終的にどのように寄与するのか、今の私には想像もつかない。

今日も私は本を借りに図書室に行く。並んだ本たちの背表紙を見て、ワクワクする自分を実感する。フォルダ内のファイル名を見ているだけではいつまで経ってもこのワクワク感を感じることはないであろう。私の存命中に果たされるかどうか定かではないが、テクノロジーがこの壁をどう乗り越えてくれるのか、非常に楽しみである。